千葉大園学報（Tech. Bull. Fac. Hort. Chiba Univ.）
第51号103-110（1997）

わび茶と露地（茶庭）の変遷に関する史的考察
―その10：松平不昧の大崎園―

浅野二郎*・藤井英二郎**
（*千葉大学名誉教授，**環境植栽学研究室）

A Historical Consideration on the Changes of the Wabicha (Tea Ceremony) and the Roji (Tea Garden)
—Part 10: Ohsakien of Matsudaira Fumai

Jiro Asano* and Eijiro Fujii**
(**Emeritus Professor of Chiba Univ.*,***Laboratory of Planting Design*)

Abstract

Matsudaira Fumai, an outstanding tea ceremonial master in the late Edo period, had criticized a gorgeous and showy tea ceremony popularized in the period, and he would have aimed to realize his philosophy to maintain the Rikyu's original philosophy of the Wabicha at the development of Ohsakien. The composition of Ohsakien, in which each gardens of eleven tea ceremonial houses and four arbors would have composed a series of walking way is considered to be clearly different from so-called stroll-style garden composed by several tea ceremonial houses located around a large pond.

1. 研究の課題

不昧のわび茶と露地については既報その6［1］で，すでに述べた．そこでは不昧の好んだ茶室・菅田庵とそれに付属する書院座敷・向月亭，それに不昧の計画にもとづいて不昧の弟・瓢庵が設計したと伝えられる向月亭の庭園についてとりあげ，菅田庵の露地と向月亭の庭とが極く自然に一体化の道を辿ったことについて考察した．

この論文では不昧が藩主の座を退いて後，彼が長いあいだ心に描いてきたと目される江戸下屋敷に営んだ庭園・大崎園をとりあげ，考察する．

2. 不昧の茶

不昧はすでにその幼少時において石州流の有沢能登，遠州流の正井道有などから茶の湯の手ほどきを受け，襲封後の明和7年（1770）11月20日には半寸庵伊佐幸琢によって真台子の伝授を受ける［2］までになっていた．ただ，ここで注目すべきは，この年 弱冠20才の不昧が『贅言』（むだごと）の一文をものしていることである．この『贅言』は明和7庚寅9月17日の奥書を持つもので，茶の湯の歴史からとき起こし，草庵わび茶の本意を明らかにするものであった．さらに不昧の当時，世間に広く行われていた贅と華美を志向する茶の流れをきびしく批判するとともに，真の茶とは“知足”と“和敬”の心を基礎に据えた礼節の茶を自ら求める茶であるとしていた［3］．

不昧はその晩年『贅言』の主旨をふまえながらも，さらに達意の茶論を展開しながら茶道の真髄を説いた『茶礎』を著わしている．この『茶礎』は，後世，遠州の『書捨文』に並ぶものとして評価されてきた．

不昧の茶に関する著述を考えるとき，特に忘れてならないものは次の二点であるといえよう．そのひとつ『古今名物類聚』は寛政元年（1789）刊行がはじまり同9年（1798）に終る前後，続，拾遺の合計18巻に及ぶ大著で，天明丁未（1787）孟春の日付を伴う序文を付していた．この“類聚”は不昧の当時，現存する陶磁器をはじめ，

書画，名物裂など茶に関わる文物の名品のデータを精細に記録，格付けしたものであって，以後茶の世界ではこれが格付けの重要な基準となったとさえいわれる［4］.

他のひとつは『雲州蔵帳』である．文化8年（1811），不昧は還暦に際し，永年にわたって蒐集した茶道の名器を嗣子・月潭に譲ることを決意し，その“道具帳”をまとめる．即ち，世にいう『雲州蔵帳』である．ただ，不昧はこれ以後も名器を蒐集しつづけ，その結果この“蔵帳”はより一層充実・整備［5］されることになる．

不昧の永年にわたる名器の蒐集活動にはひとつの理想がその底に流れていたと見られる．しかも，その理想は『古今名物類聚』の刊行においてすでに認められるものであった．即ち，このことは“類聚”の序文に「名物は天下古今の名物であって，ただ一人のためのまたただ一家のためのさらには一世代のためのみにある名物ではなく，永世万民のために伝えられるべきものである」としていた［6］．彼の名物蒐集の活動もまたこの様な考え方の上に立って，天下の名物，名器の流亡，散逸をとどめ，永く後世に伝えるためのものであったといえる．しかも，このことはただに茶具，書画，名物裂などにとどまらず，後述する茶室にまで及んだとみてよいものと考える．

3.　大崎園

不昧はその晩年，江戸在 下大崎の下屋敷を隠居所とし，悠々自適の生活を送った．

伝記によれば文化3年（1806）3月11日致仕を允された不昧は同月13日大崎の下屋敷に退隠する．時に56才であったという［7］.

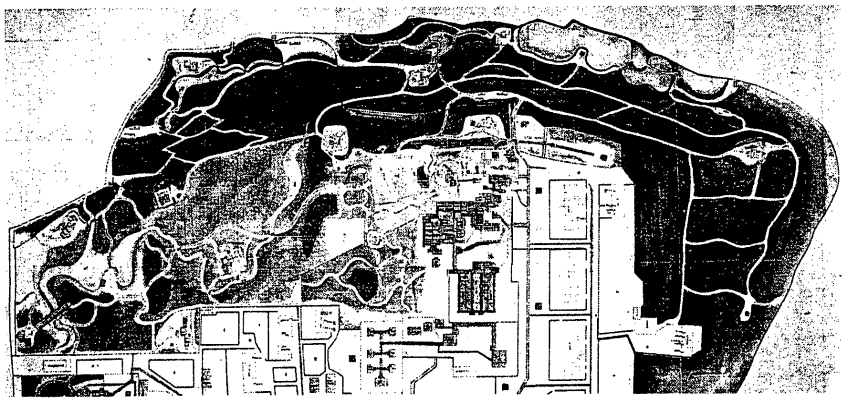
記録によれば，この大崎の別墅は総坪数21975坪1合（約72518平方メートル），うち拝領地17008坪7合（約56129平方メートル），抱地4966坪4合(約16389平方メートル)で，このうち約19630坪が庭園部分に充てられていた［8］．この園内には不昧入魂の茶亭11棟とそれに四阿4棟が配されていた［第1図］.

ところで，この大崎の別墅の地の取得は公式には享和3年（1803）それまで戸越に所有していた下屋敷と松平山城守の大崎の下屋敷とを替えることを允されたことによるとしている．ただ，別の伝えとして，この大崎の別墅は享和3年に金3000両で買い取ったものとする説もある［9］.

いま年譜をみると，天明4年（1784）6月19日浜町の賜邸を曽根準之助の品川領戸越の邸と替えることを願い出，7月13日これを允される．また寛政10年（1798）5月21日には品川戸越村の地に下屋敷を賜わる．さらに享和3年（1803）戸越の別墅を松平山城守の大崎別墅と替えることを願い出て，これを允されたことがわかる．大崎の別墅に関して，この年譜が示す如上の経緯が正しいものとすれば，不昧は大崎園の築造について，その最適の地を手に入れるべくおよそ20年の歳月を費やしているといってよい．それは後世に永く伝え残すべき千利休，船越伊予などが好んだ名席を移し建て，あるいは遠州，江月宗玩などの遺した扁額を懸けるにふさわしい茶室を建てるのに最適な土地環境を求めつづけた歳月であったとみたい．

つまり，このことは，すでに触れた“古今名物類聚の序文”にみられる不昧の名物に寄せる心情とひとつにつながるものであるといってよいと考える．

このようにして不昧の長い年月と懸命の努力とによって造りあげられた大崎園も，嘉永（1848～1854）に到り，いわゆる黒船騒動のなかで，幕府に没収され，外国船防衛のための陣屋となり，数多くの茶室は取り毀され，庭石などは台場築造に使用され，大崎園のかつての姿は失われてしまった．勿論，明治以後都市開発に伴って，園



第1図　大崎園平面図（着彩）(淡交48巻10号より)

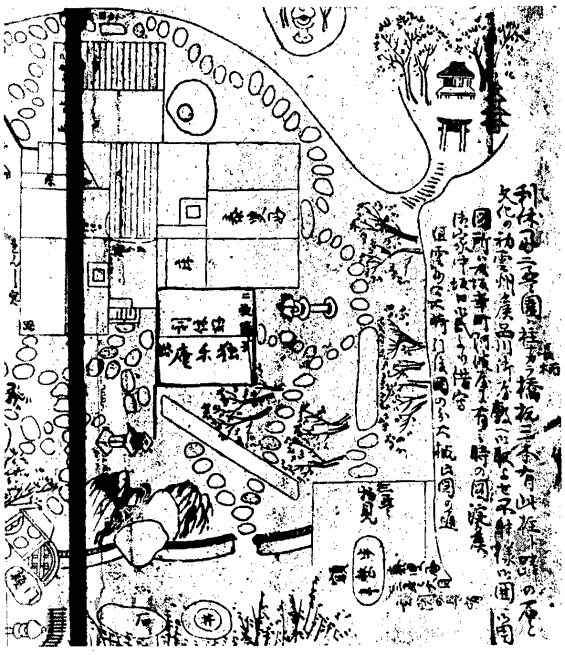
注）無年号のため正確な作図年代は不明であるが，図の内容から文化5年（1808）以後，不昧の没後それほど隔たらないまでの時期と推定される．

地はさらに大きく破壊され，今日全くその姿を求め得ない現況にあることは云うをまたない．従って，いま大崎園を論ずるに当って，現実に庭園そのものに即して考察を加えることは出来ない．ただ，幸いにもその実景を写したとされる彩色画，全園を鳥瞰的に描いたいわゆる鳥瞰図および彩色された平面図が残されており，また大崎園の拝観をゆるされた二名の人達による詳しい拝観記が残されている．さらに不昧に関する茶会記があり，これらの資料によって不昧の営んだ大崎園がどのような内容をもつものであったかをその限りにおいて考察することができる．

ここで，不昧が園内に配した11の茶亭の中から特に二つの茶亭を選び検討を加えることとする．

(1) 独楽庵

そもそも，この独楽庵は利休が長柄の橋杭３本を秀吉に請い受け，これを柱に転用し，宇治田原に営んだ二畳敷の茶室である．後，この茶室は尾形光琳，大阪阿波屋などの手を経，やがて不昧が大崎園に移し建てたもの［10］とされる．ただ，大崎園の利休好み二畳の独楽庵には船越伊予好み三畳台目の茶室と裏千家六世・泰叟好み四畳半の茶室とが付属していた［第２図］．このことから，この(1)項に限って，利休好み二畳そのものを独楽庵と呼ぶことにする．因みに後述する茶会抄にもそのように表現しており，本稿に限りこれに従う．独楽庵にこの二つの茶室がいつ付加されたかを明らかにする資料はないが，「大阪幸町阿波屋に有之時の図」によれば，このときすでに，これら二つの茶室が付属していたから，少なくとも阿波屋が所有した当時，すでに付加されていたことは明らかである．但し，この図は無年号であり，作図の時期は不明である．ただ註記に“大崎園に引き移されて以後もほぼこの図の通り”とみえ，文政３年以後の作図と見られる．



第２図　独楽庵とその露地：大坂・阿波屋に有之時の図（『茶禅不昧公』より）

注）無年号のため正確な作図年代は不明であるが，図の内容と註記から文化３年（1806）から文政初年ごろまでの時期と推定される．

不昧は自筆の茶会記をほとんど残さなかったが，不昧の催した茶会の記録は様々な筆記者によって，いく種かの会記が残されている．従って，それぞれの茶会記には異同があるが，ここでは主に“不昧公茶会記抄”を取り上げる．それはこの会記抄が文化３年から同14年までの約12年間，大崎園において催された茶会に限って誌された会記であることに由る．

いま，この独楽庵の露地についてみるとき，まず参考になるのは第２図，即ち「阿波屋に有之時の図」である．この図では独楽庵の露地と船越好み三畳台目の露地を仕切るようにして一本の太い線が引かれている．図では歩鰲亭からこの太線に向けて延段が延び，太線を境にしてその反対側に，この延段を受けるかたちで乗越石が打たれていた．ここからは飛石づたいに独楽庵のにじり口に向かう姿が図示されている．即ち，独楽庵では延段側が外露地，太線を越えて飛石の打たれた側が内露地という構成をとっていたことがわかる［第２図］．

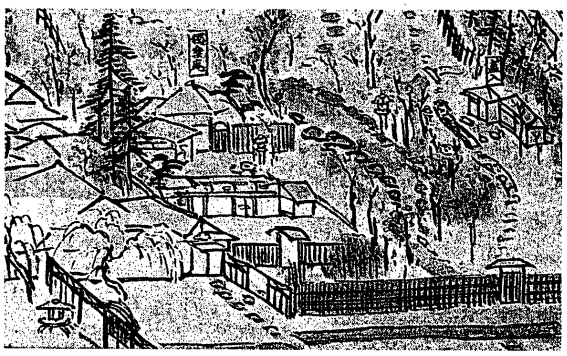
この外露地では延段を進む過程で，あの長柄の橋杭を使った独楽庵の隅柱が目に入ってくることになる．夜会の席ではこの隅柱を照らし出すようにして石灯籠が据えられていた．また，この独楽庵の外露地は泰叟好四畳半席にとっては内露地となっていて，歩鰲亭からは飛石を伴った延段が先の延段とは別に配置されていた［第２図］．

楽翁の“遊覧の記”によれば大阪阿波屋の独楽庵は，茶室はもとより，庭石，灯籠，手水鉢などのすべてをここ大崎園に移したとしていた．また，歩鰲亭の横額は船越好み三畳台目の茶室にかけられていたという［９］．これらのことから独楽庵に寄せる不昧の並々ならぬ熱意を知ることができる．

文晁の大崎園真景図（写し）を見ると，上に述べた絵図［第２図］で見た太線の部分がかなり高い垣―大崎名園の記によれば，杉皮を用いた妙心寺垣―であったことが解る．そして，この垣には，独楽庵寄りに素朴な自然木を笠木にした庭門が開けられていた［第３図］．このことは，この真景図に描かれたこの垣の部分を反対側から描いた大崎名園図（鳥瞰図）によってさらによく理解す

第３図　谷文晁の大崎園真景（模写）(部分)
（『茶道聚錦』７より）

注）無年号のため正確な作図年代は不明であるが，松平定信の致仕後間もない時期，すなわち文化９年（1812）から天保11年（1840）の間と推定される．



第４図　大崎園鳥瞰図（部分）(『茶道聚錦』７より)

注）無年号のため正確な作図年代は不明であるが，図の内容から文晁筆，真景図［第３図］の成立時期よりやや遅れるが，それほど大きく隔たっていない時期と推定される．

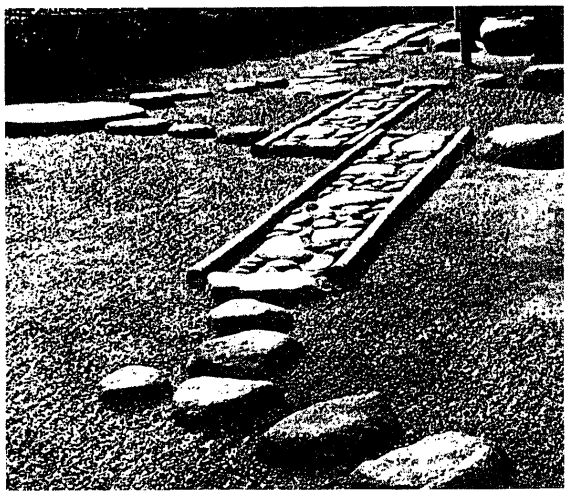


写真１　向月亭前庭の飛石と延段　（昭和32年撮影）

ることができる［第４図］．

また，真景図（写し）ではその絵姿から，独楽庵の外露地に配置された延段とそれに取り合わせて据えられた飛石の部分が砂敷きの平庭であったらしいことが読みとれる［第３図］．さらにいえば，この真景図を仔細にみるとき，この露地の姿から，不昧が計画し，それを瓢庵が設計に活かしたと伝えられるあの向月亭前庭でみた“お止め砂”の敷砂と飛石，そして延段の取り合わせの姿が思い出される［写真１］．因みに，大崎園独楽庵のこの外露地では，先に触れた石灯籠に加えて，さらに１基の灯籠が長柄の橋杭を用いた庵の隅柱を照明するようにして配置されていた［第３図］．

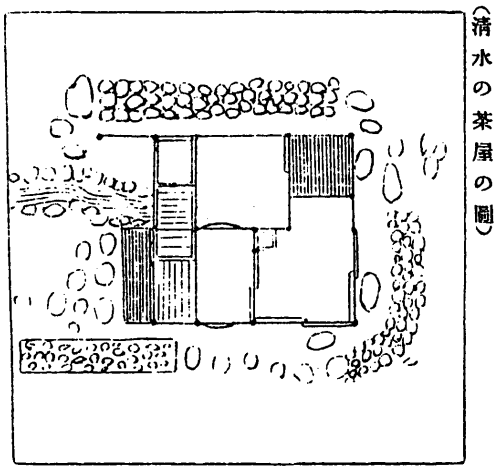
(2)　清水茶屋

茶会記抄によれば，文化14年（1817）９月27日に名残の茶会がこの清水茶屋・閑雲で催された［12］．この茶会記抄に限ってみると，約12年間に大崎園で催された茶会は合計43会（但し続会を除く）であった．そのなかに清水茶屋で催されたこの茶会と，不昧の居宅につくられた茶室・幽月軒での茶会，それぞれ１回づつが含まれていた．つまり，他の41回は，すべて独楽庵（利休二畳席）か，あるいはその付属の茶室・船越好三畳台目か四畳半（泰叟好）での茶会であった．その意味で，大崎園におけるこの茶室のもつ意味は大きいといわねばならない．不昧伝によれば，この茶亭には待合いが付属しており，「不昧公の御好みの内に，これのみ御心に叶ひたるとなん」としていた［13］．

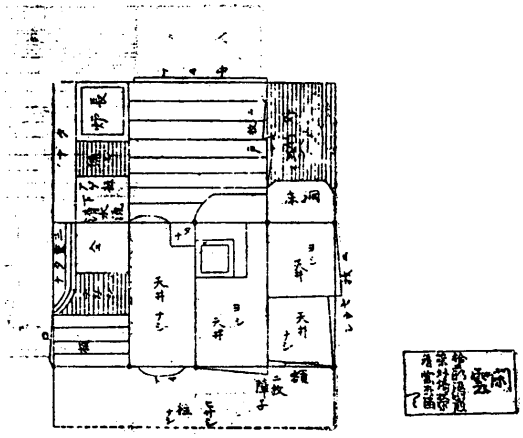
即ち，特別の思い入れを持った独楽庵を除いて，他の10棟の茶亭の中では不昧の最も意に叶った茶亭であったとみられる．この茶亭は湧泉を取り込んだものであったらしく，この湧泉を水屋で汲み，茶に用いるという茶室の設えになっていた．しかも楽翁の記録によれば，その水はやがて茶亭の前庭を飾るひとすじの流れとなっていた［第５図］．流れの岸辺には秋草が配植され，清らかな流れが秋草の間に見えがくれする風情を楽しむ［14］という，まことに細やかな心配りの配植がなされていた．

ところで，不昧伝が伝える図によれば，上述の記録を裏付けるように，湧泉は水屋の簀の子縁から直接汲み上げるかたちを採っていた．この湧泉はまた簀の子縁とほぼ直角を成すかたちで流れを形成していた［第５図］．『茶禅不昧公』には，この図とはいささか内容を異にする図を伝えている．それは清水谷茶室と名付ける図であるが，扁額に不昧の筆になる“閑雲”を掲げていたから，この図は前の図と同じ清水の茶屋を描いているに違いない．

これらふたつの図の示す内容の違いは恐らく，この茶亭が創建当時とはやや違う姿に改造されたことによるも



第５図　清水茶屋と露地（平面図）（『松平不昧伝』中巻より）

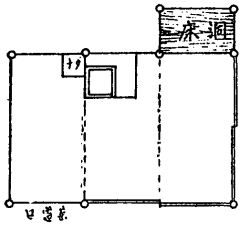


第６図　清水茶屋（平面図）と扁額（『茶禅不昧公』より）

のとみる．ただ，いずれが元の姿を描いたものであるかを明らかにする資料はない．

ともあれ，この図は先の図にくらべ，室内の様子がやや詳しく描かれていたが，しかし屋外の様子は全く省かれていた．さて，この図では湧泉を大形の揚げ板２枚で覆っていた［第６図］．つまり，ここでは所用に応じて，この板を揚げ，水を汲む設えになっていたものと考えられる．洞床をもつ三畳の茶室・閑雲の前面（西側）には２枚の障子が立ち，貴人口となっていて，この貴人口の上に“閑雲”の扁額が懸けられていた．さらに，貴人口のある茶亭の西側全面は柱なしの庇となっていた［第６図］．それは露地はもとより，茶室からゆったりと眺望を楽しむための心配りによるものとみたい．このことは楽翁の“遊覧記”の記述によって，そのように考える［15］．

北尾はその著，『茶室建築』に，これらの図とはまたい



第７図　清水茶屋・閑雲（平面図）（北尾春道著『茶室建築』より）

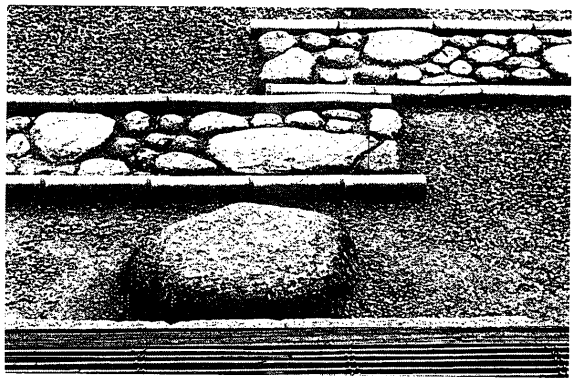


写真２　向月亭の簀の子縁と沓脱石，延段（昭和32年撮影）

ささか異なる図を載せていた．この図もその標題を清水谷茶室としていたが，図の内容からみて清水茶屋・閑雲の平面を示す図とみてよいであろう．つまり，第６図に示された清水茶屋の茶室・閑雲に付属する水屋や二畳の板敷き，あるいは洞床裏の竹のつめ打ちの簀の子縁などは一切省かれている．それだけに閑雲の茶室の有りようを端的に示しているともいえる［第７図］．このようにしてみるとき，この図が示す茶室・閑雲は第５図のそれとはかなり異なっていることが解る．即ち，第５図に示す茶室・閑雲では洞床前面の二畳と他の一畳の間には障子が立っており，一畳がいわば相伴席の如き扱いとなっていたものとみられる．

ともあれ，清水の茶屋の標題で不昧伝が伝える第５図はたとえ限られた範囲とはいえ露地が描かれていて，閑雲の露地を考える上で貴重である．この図を見る限り，茶室・閑雲の露地には，まず“霰こぼし”の延段が多用されているのが目につく．特に，ここでは床わき（南側）の二枚立ての障子の前に据えられた沓脱石と延段とがつくり出す姿には，向月亭書院座敷の簀の子縁と延段とをつなぐ沓脱石の姿を彷彿させるものがある［写真２］．このように見るとき，この茶室・閑雲は茶室として用いられたことはもちろんであるが，よりしばしば，不昧が限られた１，２の客と静かに時を過ごす場として用いたのでなかったか．つまりこの茶亭は茶室であると同時に，

四阿に通じるような庭園建築としての役割をも果たしていたのではあるまいかと考える．このようにとらえるとき，例えば湧泉を活かし，西，南の二方向をそれぞれ二枚立ての障子とした茶室とし，柱なしの長庇を取り付けたこの茶亭の構成のねらいが果たして那辺にあったかを知ることができるものと考える．

4．大崎園と不昧

およそ2万坪という広大な園地のもつ地形的な特性を巧みに活用しながら，不昧自らが好んだ数多くの茶亭を建て，あるいはすぐれた茶匠たちの好んだ茶室を忠実に移築し，一庭を構成した特異な庭園，それが不昧の大崎園であった．

そこに建てられたこれらの茶亭は，それぞれに侘び茶の長い歴史の中で，つくり出され，選びぬかれたもので，長く後世に留めおくべき価値をもつ茶亭であった．それは不昧が，すでに名物類聚の序文において示した高い理想を，これらのすぐれた茶室においても活かしきる中で，同時に不昧自身の好みをも活かすものであった．これら数多くの茶亭は不昧が催す茶会の場として，常に活用されたことは云うまでもないが，伝えによれば不昧は毎日園内の散策を欠かさず，またしばしば清水の茶屋でしずかな朝のひとときを楽しんだという［16］．

茶会記抄によれば，不昧が折に触れて催した大崎園での茶会に客として招かれた人数は12年間で，およそ160名，その客は大名をはじめ，僧侶，文人あるいは町人などさまざまな人物が含まれており，不昧の交際の広さを示すものであった［17］．

不昧の大崎園を考えるとき，特記すべきは，大崎園全園を用いて催された大茶会である．これはたまたま残された記録ではあるが，大崎園に寄せる不昧の姿勢を考える上で極めて重要である．

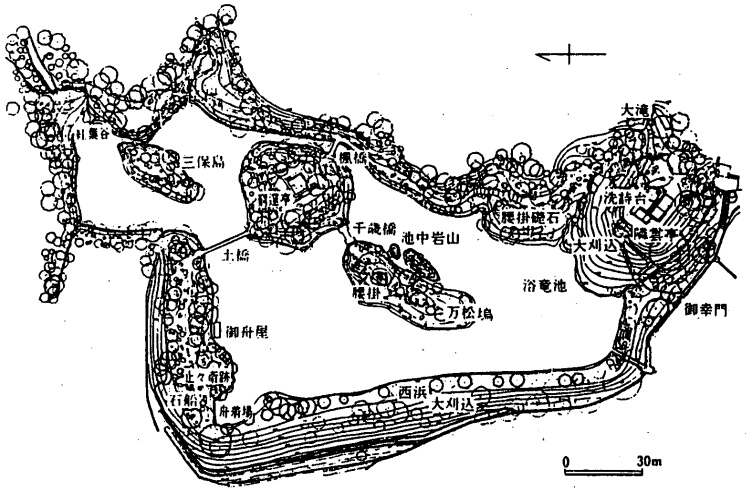
即ち；記録によれば，文化元年（1804）不昧は貴賤さまざまの茶友およそ30名に全園の茶亭を開放し，互いに茶を楽しむための一日を設けていた．この日，席主が持ち出しの道具だけでは道具組が充分ととのわない人も少なからずいた．この場合，御倉から然るべき御道具を拝借し，趣向を整えることが行われたという．この日，勿論不昧も一席を設けたが，席主が互いに自由に各席の茶をよばれ，園中を賑々しく遊覧したと伝えられる［18］．このような大茶会はその後も，花や紅葉の折など季節に応じて催されたという．

封建時代の世で，別墅とはいえ邸内の庭園を極く限られた客のための応接の茶会の場とするだけでなく，広く多くの人々に開放した事実は，この庭園を考える上で極めて重要と云うべきで，大崎園をこのようにとらえるとき，大崎園がもつ庭園構成が，不昧にとって最も意に叶った構成であったとみたい．

5．まとめにかえて

江戸時代，大名はその広大な邸にしばしば園池を中心に，その周囲をめぐりながら鑑賞する庭園を営んだ．いわゆる廻遊式庭園と称されるものである．小石川後楽園，六義園，栗林園等その好例とされる．これらの例に見るように，いわゆる廻遊式庭園では園池は一庭の主役，少なくとも園池と茶亭（庭園建築）とは同等の役割を果たしていたといってよい．しかし，この大崎園では園池があったとしても，すでに見てきた如く，それはほとんど脇役といってよい存在に過ぎなかった．この点に大名庭園・大崎園のひとつの特徴があるとみたい．

ここ大崎園ではその平面図でも明らかなように，庭園を構成する大きな要素は園内に配置された数多くの茶亭



第8図　修学院離宮上の御茶屋庭園実測図（原図：奈良国立文化財研究所）

であり，それに対応する内，外の露地であった．しかも，これらの露地が巧みに組み合わされ，それが園内に配置された茶亭を結ぶ園路の役割をも果たしていた．このことは名園の記によってもよく理解される［19］．

いま，上に述べた大崎園の庭園構成の特性を鮮明にするため，廻遊式庭園の典型のひとつである修学院離宮上の御茶屋を採りあげる．修学院を採りあげるには，もう一つの理由がある．それは上の御茶屋が東山の山裾を巧みに活かして営まれた庭園であり，御殿山の台地を活かした大崎園と，その地形的特性のうえで近いものがあることに由る．

修学院離宮上の御茶屋については，すでに前報で取りあげた［20］．故森蘊博士は上の御茶屋について，「古図によれば，西浜の上に園路を書いていない」このことから「西浜上を歩行することはなく，上御茶屋へ到着の貴人は隣雲亭下の舟着きから直接止々斎に向かって乗船し，土橋，窮邃亭，滝見灯籠そばを経て隣雲亭にもどる際のみ徒歩によった」としていた［21］．このことから，園の廻遊には谷川を堰止めて造った浴竜池が正しく組み込まれていたことが解る．すなわち，上の御茶屋にとって浴竜池は園の利用と庭園の鑑賞の上で，まことに重要な位置を占めていたことが指摘でき，それは平面図上からも明確に読みとることができる［第8図］．この上の御茶屋の平面図と大崎園のそれを比較するとき，二つの庭園の間にはきわだった相違の存在することを知ることができる．

摘　要

贅に流れ，華美に走る当世流の茶をきびしく批判し，わび茶の本意に立ちかえるべきとした不昧の茶に触れた．

“古今名物類聚”の序文で示した不昧の高邁な理想はわび茶の長い歴史の中で彫琢を受けた茶具の蒐集，保護に止まらず，茶室にまで及んだとした．而して，この理想を具体的に実現する場として江戸下屋敷の別墅に大崎園を営むに到ったとした．この大崎園の設営に向けて，不昧は長い年月の努力を傾注した事実を不昧年譜から推定した．

大崎園に利休好二畳席・独楽庵を移し建てた姿を，白河楽翁が谷文晁に描かしめた大崎園真景図（但し，現存の写しによる）と大崎名園図（鳥瞰図）及び大阪・阿波屋当時の平面図を手がかりとして検討し，不昧がいかに忠実に移建したかを考察した．ここではまた，利休好二畳席の外露地について，不昧が深く関わった向月亭の前庭のデザインに通じるもののあることを指摘した．

また，大崎園の中で，不昧が最も心に叶ったものとした清水茶屋を採りあげた．この茶亭の茶室・閑雲は洞床を伴うもので，中村はその著・茶の建築の中で利休が山崎に好んだとされる待庵を原型とするものであるとしていた．ともあれ，閑雲席の西・南両側はそれぞれ二枚立ての障子としていたから，まことに明るい茶席であったことに違いはない．不昧はしばしばここで朝のひとときを楽しんだとの伝えがあるが，それもまた，まことに宜なるかなと云うべきであろう．

これら数多くの茶亭を園内に配置した大崎園の構成は，江戸時代，大名庭としてしばしば営まれた廻遊式庭園とは，その構成の上で大きく異なるものであったことを指摘した．さらに，この庭園構成の相違を修学院離宮上の御茶屋の庭園を事例として取りあげ，これら二庭の比較において大崎園の特性を考察した．

以上のように大名庭として極めて注目すべき大崎園も，江戸末期，嘉永以後，幕府の対外防衛の場となり，その姿を消すことになる．江戸の名園，大崎園がこのようにしてして失われたことは，まことに残念というほかは無い．

なお，この論文において資料の収集には元園芸学部助手，現京都芸術短大講師・仲　隆裕氏の助力に負うところが多かった．誌して御礼を述べる．

引用及び参考文献

［1］ 浅野二郎・仲　隆裕・藤井英二郎（1990）：わび茶と露地（茶庭）の変遷に関する史的考察ーその6：石州・不昧における露地の展開，千葉大園学報，43，161—165．

［2］ 藤間　亨（1994）：評伝　松平不昧10，淡交48(10)，55—56．淡交社．

［3］ 高橋梅園（1944）：茶禅不昧公，宝雲舎，東京，155—165．

［4］ 松平家編輯部編纂（1917）：松平不昧伝　中，箒文社，215．

［5］ 藤間　亨（1994）：評伝　松平不昧11，淡交48(12)，59．

［6］ 前出，松平不昧伝　中，261．

［7］ 前出，松平不昧伝　上，16．

［8］ 前出，松平不昧伝　中，114—115．

［9］ 前出，茶禅不昧公，180．

［10］ 桑田忠親編（1985）：茶道辞典，東京堂出版，440—441．

［11］ 松平定信：大崎別業遊覧の記，東京市史稿遊園編，臨川書店，677．

［12］ 加藤義一郎編纂（1945）：不昧公茶会記抄，加藤義一郎発行，京都，78．

［13］ 一閑庵・堀丹波守（文政12）：，大崎名園の記，松平不

昧伝　中，126.
[14] 前出，大崎別業遊覧の記，678—679.
[15] 前出，大崎別業遊覧の記，678.
[16] 前出，松平不昧伝　中，136.
[17] 前出，不昧公茶会記抄，3—78.
[18] 前出，不昧公茶会記抄，89.
[19] 前出，大崎名園の記，松平不昧伝　中，129—130.
[20] 浅野二郎・仲　隆裕・藤井英二郎（1995）：わび茶と露地（茶庭）の変遷に関する史的考察ーその9：禁中の茶とその茶庭，千葉大園学報49，94—95.
[21] 森　蘊（1970）：修学院離宮，毎日新聞社，71.